

## 研究ノート

## 南里有隣研究の回顧と展望

## 一、はじめに

南里有隣（一八二一～一八六四）は、佐賀藩士にして独自の神道思想を  
発展させた国学者として、時に日本思想史学の創始者とも目される村岡典  
嗣の研究によって知られるようになった。佐賀地域においても高い知名度  
を誇るわけではないものの、西洋と日本の思想的交流を考える上では極め  
て興味深いこの人物について、これまでの研究状況を整理し、今後の研究  
発展の可能性を考えるのが、小稿の課題である。

## 二、村岡典嗣による南里有隣の「発見」

## 一 南里有隣とは誰か

国学者の中でもさして知名度の高くない南里有隣について考えるのに先  
立って、まず、村岡による南里有隣に関する基礎的事実の紹介を掲げてお  
こう。

南里有隣は文化九年正月十一日、今の佐賀市東田代町に生れた。鍋  
島侯の藩士の家で、父を十蔵元壽と称した。有鄰別名を傳作、元易、  
居易等言ひ、又松門と号した。壮年父に伴つて江戸にあつた頃、共に

## 三ツ松 誠

塙塾に入つて国学を学んだ。天保九年二十七歳の頃帰藩。父十蔵も藩  
学弘道館の和学の師であつたが、天保十一年同館の皇学寮が改築して  
和学寮と称した時、彼は二十九歳で教授に出で、又藩侯鍋島閑叟公の  
姫に和歌を教へた。同時に私塾を開いて本教館と称し、神道を講じ又  
和歌を教へた。藩士の学ぶものが多かつた。藩における役目として  
は、香焼島詰となつて長崎などにも屢々往復した。元治元年十月十四  
日五十三歳で歿した。墓は佐賀市西田代町真覚寺（真宗）にある。（歿  
日は真覚寺の過去帳には十六日とあるが、十四日が正しいとのこと）。  
交友で名の聞えた人は、古川松根、糸山貞幹、枝吉南濠等、門人には  
岡吉胤、西川須賀雄、吉村正秉等がある。副島種臣も亦教を受けたと  
いふ。明治十八年の頃遺友門弟等、生前の功績を述べて贈職願を神道  
局に提出し、同年九月二十一日管長稻葉正邦の名で大教正を贈られ  
た。

著書は凡て未刊行で手稿本のまゝ、その家に蔵せられ、上記の如く大  
正十年春、始めて大部分市場に出た。即ち古典聚目によれば、漢文書  
之部に二種、国書之部に二十二種、雑史類之部に二種、雑書之部に六  
種、名家手沢本之部に二種等、外に南里家に残存せるものが数種ある。  
就中最も多くを占めかつ重きを為すのは神道に関するもので、列記す  
ると、1 日本書紀神代卷註（五）、2 湯津爪櫛（五）、3 日本紀神代訓

義(一)、4 神代書紀類説(二)、5 神秘書(二)、6 神理十要(二)、7 神伝広意(二)、8 設奨録(二)、9 真教概論(二)、10 大祓詞余考(二)、11 古史伝抄(二)、以上は古典聚目にいれた。12 湯津爪櫛(六)、13 教要釈詠(二)、14 「うつしみ」(神道講義の草稿の断片、巻頭の和歌によりて仮に名付く)、以上は南里家に遺つたもの。神道書以外では、聚目漢文之部にいでた孝経管見(南里著稿本)、孝経考(亀井元鳳著南里自筆書入)がある。其他は概ね歌文集抄録雑史の類ひで、それらは(大部分閲読するを得たが)、之を研究上の重要資料以外におき得る。…なほ従来彼について物に見えたのは、吾人の知る限りでは嘉永年間に姫路の歌人秋元安民が編んだ類題集の青藍集等にその歌が選ばれたこと、明治三十九年刊行の佐賀県案内中に、歌人として一二行の文字で紹介されたことなど。<sup>①</sup>

## 二 平田篤胤の神基習合神道

前置きとしては長い話を始めるのが恐縮なのだが、日本文化史の第一人者であった石田一良は、神道思想を特徴づける「思想の着せ替え人形」という考え方を提起している。即ち、日本の伝統思想としての神道は、仏教や儒教など、それぞれの時代の最新思想を身に着けて変化しながら続いてきたものだ、とする議論である。

例えば前近代の神社の多くが、寺と併設されており、神仏習合が当たり前だったことは、よく知られた事実であろう。それに比べれば儒家神道(儒教+神道)はさして市民権を得た存在ではないが、それでも近年ヒットした冲方丁『天地明察』<sup>③</sup>で朱子学と神道を結びつけた学者、山崎闇斎が登場したことなどもあり、それなりに知られているものと思われる。しかし

それに比べて、キリスト教と神道とを結びつけた「神基習合神道」は極めてマイナーな存在である。

石田の説く「神基習合神道」とは、蘭学をも学んだ経験がある国学者、平田篤胤の学説を指す。本居宣長が唱えた古学神道(外来思想を排除して、外国の影響が入ってくる以前の日本の姿を復活させることを目指した神道思想)をキリスト教と習合させ、一神教的・来世教教的で倫理的な色彩を持つ神道へと変貌させた。これが神基習合神道と呼ばれるものであり、『古事記』の冒頭に登場するアメノミナカヌシこそが宇宙の主宰神であると説く篤胤の議論は、弟子筋にあたる渡辺重石丸らに引き継がれるものの、国家神道には引き継がれなかったという。

こうした議論の出発点に在るのは、村岡典嗣による「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」<sup>④</sup>である。村岡こそが平田篤胤の神道説の特徴を、来世的信仰と創造神の観念に認め、それをキリスト教の影響によるものと見た論者のはしりである。

この議論の主要な根拠は、後の大著『古史伝』にも繋がる来世応報説を論じた「本教外篇」なる未定稿本が、『畸人十編』、『天主実義』<sup>⑤</sup>、『七克七書』といった漢籍のキリスト教書を改変利用したものであったことである。

村岡の議論の骨子を示せば、次の通りである。即ち、平田篤胤は、現世において善人が報われず悪人が栄えると言う不合理な事実を認め、現世における天道に基づく善悪応報を説いた儒学者を批判した。そして、現世における応報が不合理であるという事実を認めるが故に、絶対的の神格による来世における救済・死後審判の思想へと進もうとした。かくして篤胤には、キリスト教思想を受け入れる内在的理由があったのだという。しかしながら、篤胤にとって、神はあくまでも賞罰を厳行するもので、キリスト

教における普遍的博愛の教えは受容するべくもなかったとされる。

こうした篤胤やその流れを汲む神道家に村岡は、「我が国の思想上頗る注意すべき、独自の神学的哲学的思索の試みや、特殊の思想的発展の歴史」を認め、そこに存在した思想的発展の可能性を惜しんでいる。

この村岡の議論以後、篤胤が尊王思想の先駆者（戦前戦中）あるいは日本民俗学の先駆者（戦後）として評価される風潮の中、外来思想であるキリスト教思想の平田篤胤に対する影響を低く見積もろうとする論者と、篤胤思想の持つ死後審判・救済論的性格を重要視して、キリスト教の影響を大きく見積もろうとする論者との間で、議論が対立する状況が長く続いている。<sup>⑦</sup>鎖国下の日本における、東西文化の交流・混淆・対峙の一形態として、神道思想へのキリスト教の影響という論点は、今なお興味深いものとして存在し続けているのである。

### 三 篤胤説と『天道溯源』を受容した南里有隣の神道説

ところで村岡が「特殊の思想的発展の歴史」を認めたのは篤胤だけではない。その「最も注意に値する者」が、まさに佐賀藩和学寮の南里有隣なのである。村岡は「真教概論」などの彼の著作の調査分析に基づいて神道思想家としての有隣について詳細な分析を加えている。

それによれば、有隣は平田篤胤の唱えた顕幽論——世界は、人間の生きる顕露界と、死後の神々の世界である幽冥界の二つから成り立っている——を発展させて、<sup>⑧</sup> 顕の二元によって世界は成り立つと考える。そして篤胤の「幽」「顕」が、それぞれ死後世界のオオクニヌシと現実世界のアマテラスという別の神が支配する二つの世界であるのに対し、有隣の「隠」「顕」はいずれも最高神アメノミナカヌシに根拠を持つものとされ、篤胤と

比べ、高次の統一的原理を有した議論によっており、神道の来世教化を徹底させているのだ、と言う。

また有隣は、篤胤同様に現世における善悪が死後審判を通じて来世の境遇に影響を与えると説くのみならず、不合理に見える現実の禍福であつても、そこには神の取計らいが隠れていることがあるのであつて、総体としては全く合理的に善悪応報は行われるのだと議論を進める。

そして、篤胤が天主教の来世思想の影響を受けて審判者として神を説いたのに対して有隣は、本居宣長の持つ、神に対する絶対的信頼をも継承しており、ここにおいて神は人間にとって絶対的な信頼の対象たる愛の神となったのだ、とするのである。

村岡は篤胤から有隣への変化を宗教的發展として高く評価するとともに、その背後にやはりキリスト教思想の影響を見た。その論拠が有隣に「神理十要」、篤胤の「本教外篇」同様、中国のキリスト教教理書——こちらの元ネタは当時最新のものであったプロテスタント教理書『天道溯源』——を翻訳・改変した著作が存在することである。そして村岡は、研究資料の不十分さを理由に後日に譲らなければならない論点は多いとしつつも、有隣におけるキリスト教の影響を受けた古学神道の特殊な発展を、篤胤と並ぶ、思想上の興味ある事例として評価するのであった。<sup>⑨</sup>

### 三、村岡以後の南里有隣研究の展開

#### 一 キリスト教の有隣への影響を無視する戦前戦中の研究

かかる村岡の見解からすれば、篤胤同様に有隣に注視されて然るべきところであるが、彼についてはあまり研究が進まなかった。平田篤胤は著



作・弟子筋を通じた影響力の大きさ故に、その後も思想史的に注目され、その中でキリスト教思想と神道思想の関係について論じられる機会も多かったのだが、有隣についてはその神道思想が大きく広がった形跡もないため、取り立てて注目されることが無かったであろう。

有隣の歌人仲間である古川松根を論じた内柴御風（二男童）は有隣についても言及し、彼ら小車社が自宅を輪番で会場にして集って歌に励んだこと、そこで有隣が主導的役割を果たしていたことを明らかにして、その詠歌活動を紹介している。村岡の議論からは分らない有隣の姿を示すものとして貴重な議論なのだが、有隣の神学思想については触れる所が無い。

戦時下になると、有隣は国学者の例に漏れず、その活動を賞揚する議論が発表されることになる。しかし尊王論的文脈から地域の文化人として顕彰されることはあっても、篤胤同様、時局柄外来思想の影響を事挙げすることは憚られたようだ。

例えば久保生の議論は「佐賀が生んだ国学の大家 南里有隣先生——著書肥前旧事は天覧を賜ふ——」と題するものであり、有隣の佐賀の歴史に関する著作「肥前旧事」が、天覧を受けたことを最も強調するものである。<sup>(12)</sup>他にも佐賀藩の成立期を描いた「三代譜略稿」や考証・随筆とも呼ぶべき「行余文稿」、彼の和歌を取り上げるとともに、「神理十要」を抄録紹介しているのだが、それがキリスト教の影響をうけたものであることについては沈黙を保っている。

小林弘の論じ方も興味深い。<sup>(13)</sup>佐賀高等学校教授であった彼は、宣長・篤胤を受けつつもそれとは異なる復古神道思想を生み出した有隣の思想を問題にした。そこで彼は、村岡の研究を前提にして、有隣が近年評価されるようになったとしておきながら、「皇孫にしたがひ仕へ奉るを根本の教」と

する一節を、「国体を危くするものに対し、国体防護の戦ひを戦ふ心」と解釈し、「深く直接なる信仰生活を営みつ、臣民の道を実践するが神道である」などと主張する。その際、クセノファネスやアナクシマンドロス、あるいは臨済禅師に西田幾多郎、紀平正美などの議論が利用されているものの、プロテスタント教理の流用についてはあえて無視されているのである。京都学派の議論との類比で有隣の思想を解釈し、外来思想の直接的影響を無視するあたり、一九四一年という時局を感じさせる議論である。

## 二 戦後における有隣の忘却

戦後の価値観の変化も、村岡の南里有隣研究を再評価することにはつながらなかったようで、研究の停滞が続くことになる。家永三郎は村岡の思想史学に限界を指摘して、次のように述べる。

教授の思想史学にも大きな限界があつた。その第一は教授の研究が専ら国学及び国学に聯関する問題に集中され、他の重要な問題に向ふことの比較的少かつたことである。…且また同じく学問的に体系化された思想の中でも宣長の学問の如く思想的に価値の高いものとはとも角、国学者にしても篤胤以後の諸家の如き日本思想史の大局から云つて何程の意義があるか頗る覺束なく、さうしたものに重心が集中して他の一層重要な対象に多くの力の向けられるに至らなかつたことは、研究対象の選び方として適当なりしや否や相当問題であらう。<sup>(15)</sup>

ここでの家永の批判は、明らかに南里有隣に関する村岡の高い評価を念頭に置いたものである。

とはいえ、キリスト教思想史の側から見れば、有隣の議論にはやはり興味深いものがあつたようだ。プロテスタントの中国伝道について研究を重

ねた吉田寅は南里有隣の「神理十要」を詳細に検討し、それが『天道溯源』の初版本の抄録に基づいていることを論じている。<sup>(16)</sup> しかしながらこの研究も、南里有隣の思想そのものを検討対象にした訳ではなかったのであり、有隣研究の充実は、次に紹介する前田勉を待つことになる。

### 三 有隣神道思想の再発見

かつて村岡が勤めた東北大学の日本思想史研究室出身で、彼の著作を再び世に広める役割を果たした前田勉は、村岡が重視した南里有隣についても再検討を加えた。前田は有隣についての研究史上の空白の原因を、神道思想に関する著作が刊行されなかったという資料的制約に求め、まず、村岡が存在を知りつつも未見だった、有隣の『日本書紀』『古事記』注釈書である「日本書紀神代卷」「湯津爪櫛」の概要を紹介した。<sup>(18)</sup> そこで前田は次のような村岡批判を示している。即ち、有隣は確かに「顕」「隠」の二つの世界を重視した論者であって、吉凶禍福に関する問題を重視している。だがその吉凶禍福に関する思想は、不幸な目にあった人は、その禍いを神からの処罰だと捉えて反省することを求められるのであって、自力救済的なものであり、彼の神は村岡が説くほど愛の神とは言えないのではないかと、と。ついで前田は、「神理十要」と『天道溯源』を丹念に比較検討し、『天道溯源』を改変して「神理十要」を作成する際に取捨された箇所を明らかにした。そして、有隣がキリストによる贖罪を「神理十要」から抹消し、個々人が悔い改めて善事に励むことの重要性を唱えるという賞罰応報主義の立場に立っている点を強調して、信仰義認論——自助努力ではなく、救い主キリストへの信仰のみに従って生きる——を受容できなかった点に彼の思想の特徴を認めている。<sup>(19)</sup>

これらの前田の研究は、原テキストの分析を通じて、詳しく有隣の思想を再検討した議論であり、村岡が打ち出した「愛の神」という有隣神学のイメージを実証的に更新する、研究の進歩だと言いうことができるだろう。同時に前田の議論は、原史料の発掘に基づく研究進展の可能性を示しているという点でも興味深い。村岡典嗣が研究の参考にした史料のうち、今では所在が明らかでないものもあり、また村岡が知らなかった史料も少なくない。有隣研究は、史料調査に基づいて大きく進展する余地があると言えるのである。

たとえば、鍋島報効会が所蔵する鍋島文庫には、「真教十要」<sup>(20)</sup>なる著作が眠っていた。同書は佐賀県立図書館に鍋島報効会から寄託されたものであり、村岡や前田が紹介した、南里家旧蔵書とは伝来が異なる。巨郭を備えた写本に見え、佐賀藩関係者にこれが伝わってきたとするならば、単なる習作ではなく形式的にもある程度整った、他者の閲覧・内容の伝播を認めた著作として評価できるのではなからうか。その意味で彼の思想の一つの完成形を見ることができないのではないか。

内容的には、村岡が比較的晩年に近い著作だと考えた「真教概論」に類似しつつも、キリスト教教理書の影響を受けた「神理十要」と同様の形式を取って、思想を十の命題に分かりやすく纏めたものになっている。「真教概論」に比べて論理構成上はより体系的であり、従って、内容面から見ても完成度は高いと言えるよう。

この「真教十要」については最近、片岡龍によって翻刻紹介がなされているが、他の著作との前後関係や内容の比較分析はなされないままであり、研究の進展が期待されるところである。<sup>(21)</sup><sup>(22)</sup>

#### 四 佐賀藩の文化サークルのなかの有隣

しかしながらここまで見てきた彼の姿は、あくまで独自の神道神学の創出者としてのそれに限られていた。佐賀藩内の文化人としての彼については、敗戦前の一部の研究を除けば、注目されない状況が続いていたと言えよう。伝記的事実についても、前述の村岡以後の思想史的研究は、ほとんど認識を深めていないと言える。

こうした状況で注目すべきなのが、志津田兼三『蟬守さん―歌文集に見るその生涯―』<sup>(23)</sup>である。幕末から明治にかけて生きた佐賀の歌人、今泉蟹守の生涯を、歌集を中心に描き出した同書は、佐賀藩の文化人としての南里有隣について言及するところも多い。

それによれば、安政二年完成の蟹守最初の著作『樟葉三十六歌撰』に序文を寄せているのが彼、有隣なのである。有隣は鍋島直正周辺のエリート集団の中にいたと考えられ、幕末の佐賀藩歌壇の中心、古川松根の小車社の同人でもあり、『小車集』の他、歌集『田家集』『行余詠草』にその歌を残す歌人であったという。そして序文を寄せた『樟葉三十六歌撰』ではあるが、蟹守が自分たちを含む佐賀の歌人を「三十六歌仙」になぞらえることについて有隣は、僭越な振る舞いと見做していた、と論じられている。<sup>(24)</sup>

また同書は、『松浦党関係諸家系図』から有隣の父南里元壽が弘化三年に提出した系図を引用し、「有隣、初和三郎、伝之助、実名初居易。勤役御什物方差次、諸役所御記録方書写役、御什物方、御道具方、御庭方。妻宮富一右衛門娘」と紹介している。

これまでの有隣研究が、基本的には、日本思想史・神道史における注目すべき特殊例として彼を位置付けてきたのとは異なり、志津田の議論は、内柴の議論以来の、国文学・和歌史・地域文化史の文脈で有隣を取り上げ

るものである。神道思想とキリスト教思想の邂逅という問題に視野を限らず、幕末佐賀藩の文化環境の中で彼の学問を考える方向性を改めて示したものだと言えるだろう。

翻って鑑みれば、こうした点について村岡はほとんど研究の必要性を認めておらず、その後の研究者も、これに追隨するものが多かった。しかしながらそうした問題関心の限定が、研究の停滞にもつながっていたのではなからうか。こうした面から見れば、有隣に関わる資料が少ないとばかりは言えない筈である。

#### 四、まとめと展望

村岡典嗣の研究以来、国文学におけるキリスト教思想の受容に関する問題は、本来教えらしい教えを持たなかった神道が、如何に独自の神学・宗教性を備えるかという問題と関わって、興味深い論点として知られるようになった。平田篤胤と南里有隣は、その二大重要人物だと言えるものの、有隣については長らく研究が低調な状況にあった。

しかし近年、原テクストの調査に立脚した有隣の神道思想の研究が進展しつつある。諸書を照合した、彼の思想の丁寧な分析が俟たれるところである。

また、神学思想家ではなく、佐賀藩の文化サークルの一員としての有隣については、一定の資料の残存が確認されているにもかかわらず、ほとんど研究がなされていない状況にあった。近年では、文学研究の世界は言うまでもなく、歴史学の世界でも、藩単位の文化活動についての関心は高まっている。<sup>(25)</sup> こちらの方面から文化史的・社会史的な有隣研究を進めるこ



とは、幕末佐賀の文化状況を考える上で有意義な作業となることが見込まれる。そして、一見迂遠なように見えても、こうした地域に即した資料調査こそが、東西文明の思想的交流についての研究に対してもフィードバックをもたらしものと筆者は期待している。<sup>(27)</sup>

## 注

- (1) 村岡典嗣『増訂日本思想史研究』岩波書店、一九四〇年、三三九～三四一頁、脱稿は一九二三年。なお、これに先立つ『肥前国誌』は、四行ではあるが、歌人としての彼について紹介している。森錦洲『肥前国誌』青潮社、一九七二年、初出一九〇三年、八七頁。また、引用文中の「古典聚目」とは、大阪鹿田松雲堂の『古典聚目』九二、一九二二年。
- (2) 石田一良『神道の思想』『神道思想集』（筑摩書房、一九七〇年）。
- (3) 冲方丁『天地明察』角川書店、二〇〇九年。
- (4) 前掲村岡。
- (5) その後伊東多三郎が、村岡が『天主実義』としたところは『三山論学記』であったことを明らかにしている。「禁書の研究」(『近世史の研究』第一冊、吉川弘文館、一九九一年)。
- (6) この可能性は明治維新に伴う欧化によって押し流されてしまったとされる。
- (7) 山田孝雄『平田篤胤』宝文館、一九四〇年、海老沢有道「国学における天主教学摂取」(同『南蛮学統の研究』創文社、一九五八年)、ドナルド・キン著、芳賀徹訳「平田篤胤と洋学」(同『日本人の西洋発見』中央公論社、一九六八年)、三木正太郎『平田篤胤の研究』神道史学会、一九六九年、田原嗣郎「『霊の真柱』以後における平田篤胤の思想について」(『平田篤胤 伴信友 大國隆正』岩波書店、一九七三年)、平川祐弘『畸人十編』と平田篤胤(同『マテオ・リッチ伝』二、平凡社、一九九七年)、子安宣邦「国学の神学的再構成」(同『平田篤胤の世界』ぺりかん社、二〇〇一年)など多数。
- (8) 有隣は篤胤の『古史伝』を重んじ、また篤胤直門の六人部是香と交友があったという。
- (9) 以上、村岡典嗣「南里有隣の神道思想」(同前掲著)。

- (10) 内柴御風『寧楽園歌伝純忠古川松根』私家版、一九二六年。
- (11) 久保生「佐賀が生んだ国学の大家 南里有隣先生——著書肥前旧事は天覧を賜ふ——」(『一四(肥前史談)』一四一九、一四二一、一四二二、一五一一、一九四〇～一九四一年)。
- (12) ただし「肥前旧事」の自跋に「かけ巻くもかしこき高根の雲居よりみそなはし仰せ言天くたりぬる」とあることが根拠であり、果たして久保の解釈でよいのか、検証が必要であろう。
- (13) 小林弘「南里有隣先生に就いて」上、二、三(『肥前史壇』一五一一、一五一一、一五一五、一九四一年)。
- (14) 華嚴経由来ではあるが、西田哲学の鍵概念とされる「二即多」の概念が援用されている。
- (15) 家永三郎「日本思想史学の過去と将来」(同『家永三郎集』一、岩波書店、一九九七年、初出は一九四八年)、一三六～一三七頁。
- (16) 吉田寅「中国キリスト教伝道文書の研究」汲古書院、一九九三年。
- (17) 近年平凡社の東洋文庫で、前田勉が編集した村岡の著作が相次いで刊行されている。
- (18) 前田勉「南里有隣の記紀注釈——村岡典嗣未見史料の紹介——」(『國學院雑誌』一〇四一一、二〇〇三年)。
- (19) 前田勉「南里有隣『神理十要』におけるキリスト教の影響」(同『江戸後期の思想空間』ぺりかん社、二〇〇九年、初出は二〇〇八年)。
- (20) 鍋島家文庫 鍋九九一～六四。
- (21) 片岡龍「南里有隣『真教十要』解説と翻刻」(『日本思想史研究』四四、二〇一二年)。
- (22) 十分な検討を踏まえない現段階での印象だが、例えば、愛の神として有隣の神を評価する根拠となる、神から人にその罪を解除する技法が付与されたとする説(前掲前田「南里有隣『神理十要』におけるキリスト教の影響」)は、「神理十要」及び「真教概論」に見られる一方、「真教十要」では明示的に登場しないように見える。
- (23) 志津田兼三『蟬守さん——歌文集に見るその生涯——』(佐賀新聞社、二〇〇一年)。
- (24) 彼については、ほかに中原勇夫『今泉蟹守歌文集』私家版、一九七一年、亀井森「佐賀大学所蔵今泉蟹守資料」(『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』

四、二〇一〇年）などがある。

(25) なお先述の有隣の「真教十要」には「靉屋文庫」の印があるが、「靉屋」は蟹守の号である。二人の交流がこの事実の背後に想定され、興味深い。

(26) 佐賀藩に関しては、本センター界限でも度々研究成果を公表するところである。近年の日本近世史研究のなかでは、「藩社会」「藩地域」に関する研究が広がりを見せており、岡山藩、尾張藩や松代藩、熊本藩といった地域についての共同研究は、その地域に即した文化活動への注目を深めている。こうした「藩」研究の変化については、ひとまず小川和也「藩」概念（歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版、二〇一二年）を挙げておく。

(27) 実際、柴田花守や岡吉胤など、佐賀の国学者が近代神道史に名前を残すケースは数多い（副島種臣も、あるいはこれに数えてよい）。彼らを生んだ佐賀地域の文化的土壌へのアプローチは、思想史研究者にとっても、的外れな作業にはならない筈である。自らも課題にしたいと思う。拙稿の見落としや誤りなど、ご批評賜りたく願います次第である。

## 【付記】

本稿は、平成二六年度佐賀大学学内研究プロジェクト「地域間交流分析に基づく佐賀地域の歴史文化研究―地域学の発展に向けて―」の成果である。また、平成二二～二四年度日本学術振興会特別研究員PDとしての研究成果の一部を利用している。

（佐賀大学地域学歴史文化研究センター講師）